

# 気象庁キャンペーン資料

16 - 3

気象庁広報室編集

## 3月の気象

### 天気の特徴

3月は大陸から流れ出る寒冷な冬の季節風が衰え、夏の季節風に入れ替わる時期にあたります。その交代の様子を、青森と東京の日照時間、降水量、平均気温の比較によって見てみましょう。

図1に示す青森市では、2月から3月にかけて日照時間が2倍に増え、降水量（主として冬の季節風による雪）が半分近くに減ります。平均気温も1月・2月の氷点下から抜け出します。3月の青森は、「雪解け」「風光る」「山笑う」などの季語がよく当てはまります。一方、図2の東京都千代田区では、2月から3月にかけて、降水量が2倍に増えます。2月までの冬晴れが影をひそめ、3月は低気圧が本州の南岸沿いを通過しやすくなるためです。

### 3月の気象災害

3月は近年でこそ大きな災害が発生しておらず、梅雨期から秋にかけての大雨や台風による災害ほど目立つことはありませんが、過去にはいくつも大きな災害が発生しています。

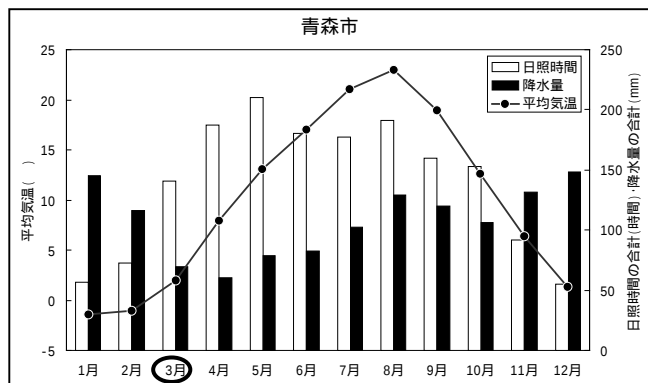


図1 日照時間、降水量、平均気温の平年値(青森)

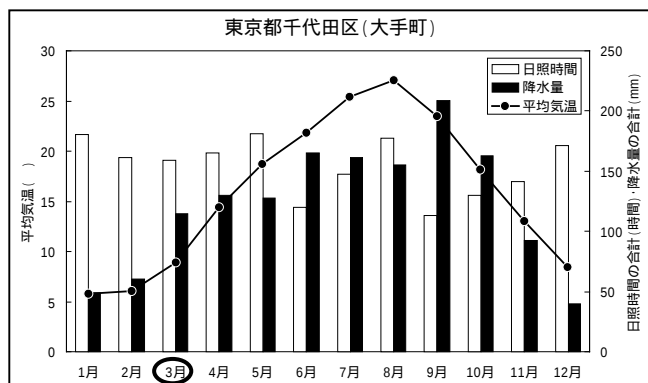


図2 日照時間、降水量、平均気温の平年値(東京)

3月の災害は『風』で特徴づけられます。図3は東京における日最大風速が10 m/s以上の日数の平年値ですが、3月が4.2日と1年で最も多くなっています。また、月平均風速でも3月が最も強く、この傾向は東京ばかりでなく、函館や仙台、広島や福岡でも見られます。

このように風の強い日が多いのは、日本付近で暖かい空気と冷たい空気がせめぎあっているからで、寒暖気の境目で発生し発達する低気圧によって思わぬ災害が発生することがあります。

20,000戸を超える焼失家屋と2,000人を超える死者を出した1934年3月21日の函館大火は、日本海で急速に発達した低気圧による強い南よりの風の中で発生しました。函館では出火直後に最大風速、南南西24.2 m/sの強い風を観測しています。

また、強い南よりの風と暖かい雨は、それまでに降り積もっている雪を解かし、泥流や地すべり、なだれを発生させることがあります。現在の青森県鯉ヶ沢町では、1945年3月22日に低気圧による暖気と雨による雪泥流で1つの集落が壊滅的な被害を受け、88人も人命が失われました。

このほか、本州中部の山岳地帯や北海道でなだれや融雪によって大きな災害が発生するのも、3月が多くなっています。

3月に入ると日差しが強まり、気温も上昇してくることから、外出する機会も増えてきます。しかし、こうした穏やかな季節の変化の中にも思わぬ落とし穴が潜んでいることがあります。気象による災害や事故から身を守るために、常に最新の気象情報を確認するなど、慎重な行動が必要です。

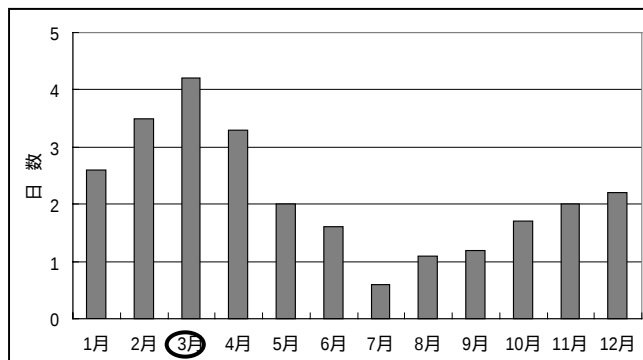


図3 日最大風速10 m/s以上の日数の平年値(東京)

## 空港にも気象台があることをご存知ですか？

### ～ 航空機の安全運航のための気象業務 ～

#### 1 どうして空港に気象台が必要なのか

航空機は、霧の発生や台風の接近により欠航や遅れが生じたり、気流の乱れで機体が揺れたりするなど、運航中のあらゆる場面で気象の影響を受けます。

このため、気象庁は、航空機が安全に、時間どおりに、効率的に、快適に運航できるよう、離着陸に必要な空港の気象観測や航空関係者への情報提供などを行うため、下図のとおり全国 88 の空港に航空地方気象台、航空測候所、空港出張所などを設置しています。

#### 2 航空気象業務は世界共通

航空機は国内だけにとどまらず、外国の多くの都市間で運航されていますが、世界中を安全に、かつ混乱なく飛行するためには、国際的に統一された方式によって航空気象業務が実施される必要があります。そのため、国連の専門機関である世界気象機関（WMO）及び国際民間航空機関（ICAO）では、航空気象業務の国際基準を定めており、当庁の航空気象業務も、この基準に準拠して実施しています。

#### 3 空港の気象台で行われる気象観測

航空機は向かい風の場合に浮き上がる力をより大きく得よう設計されているため、風の吹き方によっては通常と反対側の方向へ離着陸しなければなりません。

また、雪、霧や低い雲などによってパイロットから滑走路がよく見えない状態であったり、ウインドシャーと呼ばれる風向風速の急変域や突風への遭遇

によって離着陸時の機体の体勢や上昇（あるいは下降）経路が急変したりすると、安全に離着陸することが難しくなります。

そのため、各空港では、1 時間あるいは 30 分間隔で風、視程、雲、気温、気圧、大気現象などの定時観測を行うほか、気象状態を常に監視し、重要な変化が生じた場合には、直ちに特別観測を行います。

#### 4 空港の気象台で行われる気象予報

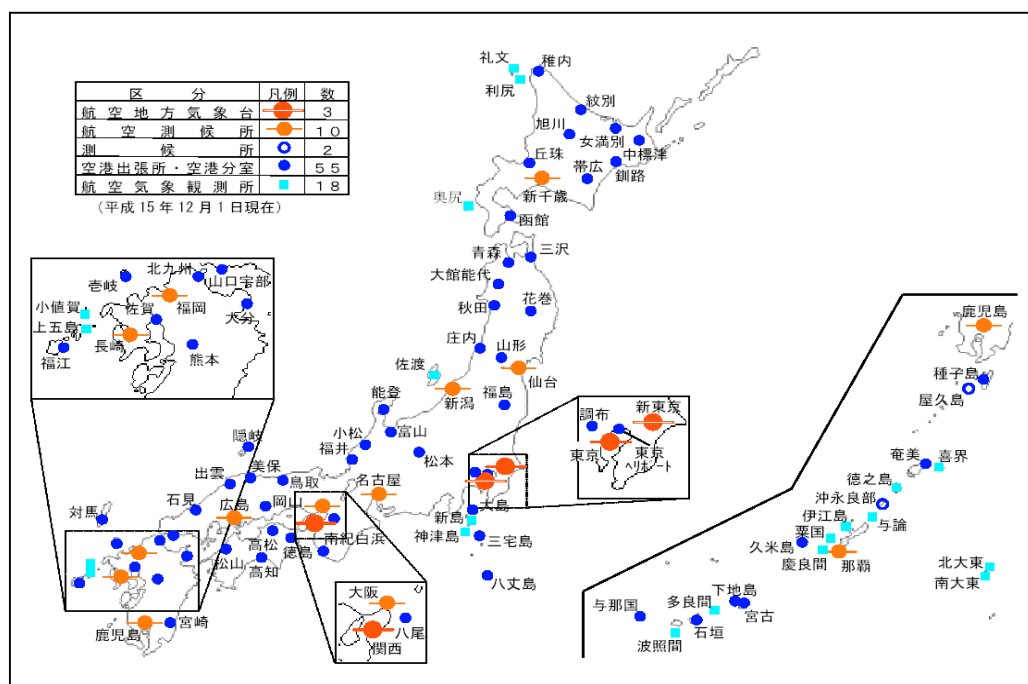
航空機の安全で効率的な運航には、気象状況の観測だけでなく、その予報が重要なポイントとなります。

各空港では、気象状況の見通しについて航空関係者へ解説を行うほか、主要な空港では、空港とその周辺についての各種予報、警報などを適時・的確に発表しています。

#### 5 国際協力

航空機が世界中を飛び回っている現在においては、その安全性、効率性のために国際協力が欠かせません。

気象庁は、WMO と ICAO が定めたアジア / 太平洋地域の国際センターとして、日本周辺上空の雷や乱気流などに関する悪天情報の発表、アジア / 太平洋地域の火山の噴火や火山灰に関する情報の発表、および航空機の運航に必要な各種気象情報の国際交換などの業務を行い、国内のみならず、世界中の航空機の安全運航に貢献しています。



[ 図 空港の気象台など ]